帝小発２２－G007号

10月号（No.7）　2022年９月26日

帝京大学小学校だより

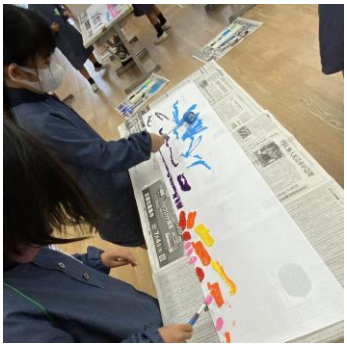
帝京大学小学校

カリキュラム・マネジメントとこれからの授業

帝京大学小学校　校長　石井　卓之

先日１年生の図工と音楽がコラボレイションした授業を見ました。これは、今年度の本校の教育改善の一環として行っているものです。新学習指導要領総則編にも、「（前略）教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。」と記載があります。そして具体的な案の例として「教育内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと」が示されています。今回の取り組みはこの実践です。

初めにピアノ演奏の「メヌエット」を、曲想やリズム、音の強弱など、イメージを膨らませながら聞きます。膝の上でピアノを弾く動作をする子、隣の子とアイコンタクトをして同じリズムで体をゆする子、目を閉じて聴き入る子など、思い思いの聴き方をしていました。次に、聴いた曲のイメージを大きな紙の上でローラー、太さの異なる筆など色々な用具を使い、パレット上にある色を自由に使って描きます。自由度の高い活動なので、初めは「何をしたらいいか分からない。」と言っている子もいましたが、友達がどんどん描き始めると一緒になって楽しそうにローラーを動かし、色を広げていきました。「ピアノの音が跳ねていたので、点々」とイメージを紙の上に表している子もいました。この活動を見ながら、以前読んだ「１３歳からのアート思考　末永幸歩　ダイヤモンド社」を思い浮かべました。筆者は中学・高校で美術の教師をしています。書籍の冒頭で、小学校から中学校で最も人気をなくす教科は美術であり、その原因を「技術・知識」偏重型の授業スタイルが、中学以降の「美術」に対する苦手意識の元凶ではないか、と述べています。また、数学が正解を見つける能力を養うのに対して、美術の本来の目的は自分なりの答えをつくる能力を育むことにあるとも述べています。この本の中に、モスクワ生まれのカディンスキーが「幼少の頃から親しみ愛してきたクラシック音楽において、音を色に置き換え、リズムを形で表現することで具象物が描かれていない絵」という表現の花を咲かせたとあります。



１年生の子どもたちも、友達と比較してより写実的な絵を「よい絵」と認識して、それに沿わない作品ができあがると「苦手」意識をもちます。本来人間がもっている表現したいという欲求とは異なる方向に進んでしまいます。今回の授業のゴールイメージは「表現したいという欲求」を大切にし、表現する喜びに触れることだと考えています。もちろん、よりよく描くための基本的な技能はあると思います。それを引き出すのは、教師の授業設計であり、環境構成としての紙の材質や大きさ、描くための用具、音楽に浸り切る・没頭して描ける教室環境などです。また、子どもたちを学習活動へ誘う発問もそうです。

今回は基本２人のペアで学習しましたが、１人で描きたい子、ペアで進めたい子などの学びのスタイルを子どもに委ねることもできます。

新たな授業へのチャレンジを繰り返し、よりよい授業をチーム帝京小で創り上げていきます。